

氏名	サギアンポーナーニット ナティニー	
学位の種類	博士（美術）	
学位記番号	博美第17号	
学位授与年月日	平成29年3月24日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者	
題目	学位論文題目	タイにおける陶磁器デザインの研究—ベンジャロン陶磁器を中心に—
	研究作品題目	ベンジャロン陶磁器におけるデザインの提案 1) ベンジャロン技法を展開した花器シリーズ（14点） 2) ティー&デザートセットⅠ（13点） 3) ティー&デザートセットⅡ（13点）
論文審査委員	主査 准教授 長井 千春 副査 教授 太田 公典 副査 准教授 関口 敦仁 外部 金沢美術工芸大学柳宗理記念デザイン研究所 審査委員 シニアディレクター 森 仁史	

1 学位論文の要旨

本研究は、ベンジャロン陶磁器のタイ陶磁史における位置づけを明らかにし、さらにタイ陶磁器産業の近代化の過程で量産陶磁器製造技術指導を通じ日本から受けた影響を調査考察するなかで得た知見をもとに、タイらしいデザインとしてのベンジャロン陶磁器の可能性を作品制作によって提案することを目的としている。

本論の構成は下記の通りである。第1章「はじめに」で、研究の背景と目的及び研究の範囲と方法論を確認したうえで、本研究の内容を述べていく。本研究では、タイのベンジャロン陶磁器を中心に研究・考察するが、デザイン提案をより説得力のあるものとして成功に導くために、タイ陶磁器の現在の姿、歴史背景を知ったうえでデザインすることが不可欠だと考え、タイ陶磁史や陶磁器業界の調査を基礎作業として進めることとした。第2章「タイ陶磁器の前史」では、ベンジャロン陶磁器が誕生するまでのタイ陶磁史について、現在タイ国内外にある情報、資料、文献等を出来る限り収集するなかで、タイ陶磁器及び東南アジア陶磁器（インドシナ半島の陶磁器）に関する様々な研究者の論考と見解の整理、比較分析を通じ、さらに、これらに筆者の考察を加えながらタイ陶磁史について論述する。

第3章「ベンジャロン陶磁器」では、タイ陶磁史における先行研究・参考文献の中で、ほとんど述べられてこなかったベンジャロン陶磁器について、タイ国内の美術館や博物館でデータ収集し、実物調査及び関係者のインタビューを実施し、その中から得られた知見、資料の整理と分析をもとに考察を行い、第1節「歴史」にまとめた。また、第2節「ベンジャロン陶磁器の文様と色彩」では、第1節に基づき、中国の五彩から伝わった輸入品としての初期ベンジャロン陶磁器と、今日もタイ陶磁器として絶大な人気を誇る現代ベンジャロン陶磁器の文様・色彩の変遷について論述する。

第4章「タイ窯業の近代化—日本との関わりのなかで—」では、第3章までの歴史分析を

ふまえ、今日までのタイ陶磁器デザイン業界とそれが直面する課題について考察を進める。本研究の主眼である作品制作およびデザイン提案に取り組むために、その根拠や方向性を位置づけなければならないが、このためには、ベンジャロン陶磁器を含むタイ陶磁器の生産がどのように発展してきたのか、何を目指そうとしてきたのかを把握する必要がある。第1節「タイ窯業の近代化」において、1991～1997年のJICAによる日本からの窯業技術移植の過程を読み解きながら、タイ陶磁器産業におけるデザイン振興政策との関連性を考察し論述する。また、第2節「タイにおけるデザインの展開」では、戦後1960年代以降、タイ国際芸術工芸サポートセンター(The SUPPORT Arts and Crafts International Center of Thailand)やタイデザインセンター(Thailand Creative & Design Center)が主催したデザイン振興のもとで、どのようなデザイン展開がなされてきたのか等について、タイの陶磁器デザインを中心に論述する。

第5章「陶磁器デザインの提案」では、第1～4章までの歴史・文化的考察の研究成果を踏まえ、これから国際的認知を受けうるタイらしい陶磁器としての新たなベンジャロン陶磁器のデザイン提案に向けて作品制作を実施した。第1節「作品制作の背景と目的」では、本研究の作品提案の背景及び目的について述べた。第2節「ティーセットと菓子皿の提案」では、本研究の最終提案作品（ベンジャロン陶磁器におけるデザインの提案）の一つとなった「ティー&デザートセットⅠ、Ⅱ」に関する社会背景としてのタイ喫茶文化・菓子文化について考察し、また作品制作過程に取り組んだ釉薬、顔料、焼成実験と試作について述べた。第3節「ベンジャロン技法による加飾デザインの提案」では、本研究の最終作品の一シリーズとなる加飾デザイン提案を創作するために、ベンジャロン技法における新たな加飾デザイン方法論を探り、その可能性を模索すべく実施した実験・試作成果について論述した。最後に、第4節「研究作品」では、本研究の考察過程で得た知見やアイデアをもとに、タイの伝統文様からインスピレーションを得て、幾何学形態と繊細な文様をデザインキーワードとする筆者独自の現代的なベンジャロン陶磁器作品（ベンジャロン陶磁器におけるデザインの提案）1)ベンジャロン技法を展開した花器シリーズ(14点)、2)ティー&デザートセットⅠ(13点)、3)ティー&デザートセットⅡ(13点)について述べた。

第6章「結びに」では、本研究の成果である新たなベンジャロン陶磁器のデザイン提案までの考察過程、そして筆者がまとめたタイ陶磁史が、タイ美術研究、さらにタイらしさの模索とタイ独自のデザイン展開のための一助となることを期待して、論述を締めくくっている。

2 学位論文審査の要旨

サギアンポーニット ナティニー氏の研究は、学位請求論文「タイにおける陶磁器デザインの研究—ベンジャロン陶磁器を中心に—」およびベンジャロン陶磁器におけるデザイン提案作品、1)ベンジャロン技法を展開した花器シリーズ(14点)、2)ティー&デザートセットⅠ(13点)、3)ティー&デザートセットⅡ(13点)から成り立っている。本研究は、サギアンポーニット ナティニー氏の出身地であるタイの陶磁器分野における新たなデザイン提案に際して、あるべき「タイらしさ」を歴史と創作の分野で探求したものである。ベンジャロン陶磁器のタイ陶磁史における位置づけを明らかにし、さらにタイ

陶磁器産業の近代化の過程で量産陶磁器製造技術指導を通じて日本から受けた影響を調査考察するなかで得た知見をもとに、現代生活におけるタイらしいデザインとしてのベンジャロン陶磁器の可能性を、作品制作によって提案することを目的としている。

【論文】サギアンポンパーニット ナティニー氏は、現代のタイで国民的人気を集めるベンジャロン陶磁器を論文の題材に取り上げることとした。まず最初に、これまであまり明確ではなかったタイ陶磁器製造の歴史的経緯の把握から始めなければならなかった。なぜなら、ベンジャロン陶磁器は古代から生産されていたわけではなく、タイ陶磁器の歴史的系譜を踏まえなければ、その実態と意味を捉えることができなかつたからである。

論文は、インドシナ半島（東南アジア）におけるタイ陶磁史および近現代のタイ陶磁器デザイン史を柱とする第1章から第4章、デザイン提案および作品制作を中心とする第5章、第6章で構成されている。

第1章では研究の背景と目的及び範囲と方法論を述べ、第2章ではインドシナ半島における陶磁史をタイ王国成立前後を基点に整理し、タイ陶磁器のアイデンティティーの源泉を探った。歴史的に国境が入りくむインドシナ半島の陶磁史は、中国陶磁や日本陶磁のように研究主題としてまだ十分確立されていない。サギアンポンパーニット ナティニー氏はタイ国内外で収集した歴史資料・実地収集データを整理分析し、タイ陶磁史について独自の基軸を確定した。第3章では、今日も国賓贈答品として製造され国民に人気を博すベンジャロン陶磁器を取り上げ、タイ陶磁史における連続性と意義について考察している。これまでタイ陶磁器といえば宗胡録(スンコロク/サンカロク)を中心に論じられてきたが、氏はこれまで国外の陶磁研究でほとんど触れられてこなかつたベンジャロン陶磁器に着目した。タイ国内の美術館、博物館で作品データを収集、実物調査を実施するとともに、関係者にインタビューを行い、ベンジャロン陶磁器の創始から再興までの過程と歴史を明らかにした。第2および3章は、近代国際陶磁研究会誌（近代陶磁 18-27 第16号 2015年）で論文として発表され、独自の視点を提示する陶磁史研究として高い評価を得た。

1954年にコロombo・プラン（開発途上国援助のための国際機構）にタイと日本が加盟して以降、1960年代から日本の陶磁器量産技術とともに、陶磁器デザインの考え方がタイに導入された。第4章ではタイ陶磁器産業の発展における日本との関係を、1991～1997年にJICAが実施した国際協力事業「タイ北部セラミック開発センター事業報告書」から読み解き、その窯業技術移植とデザイン振興政策との関連性を浮き彫りにした。タイの陶磁器生産が産業として本格化したのは第二次世界大戦後であった。氏はこの時期の技術革新とデザイン改良（ベンジャロン焼もその一部）が日本の技術援助により、タイに移植されたこと、つまり、タイでは日本からの刺激が、技術基盤の整備からデザイン意識の覚醒へと導いたことを明らかにしたのである。さらに、ベンジャロン陶磁器再興のきっかけも、日本による窯業技術教育であったことが解明され、氏の作品制作とデザイン提案において日本の窯業技術をベースに展開する意義を見いだすことが出来た。

第5章は、第1～4章の考察を踏まえて実践したベンジャロン陶磁器のデザイン提案と制作の報告である。タイ伝統の陶磁器意匠や技法に関する調査分析に基づいた焼成実験、釉薬実験を重ねることで着想した作品提案までの記録である。これまでタイの陶磁研究者が目を向けてこなかつた技法研究として、その視点と取り組みが高く評価できる。

第6章結びには、氏のデザイン提案が自ら調査考察したタイ陶磁史上でどのような位置づけにあり、未来に向けて今後どのようにデザイン展開をなすべきか、ベンジャロン陶磁器を含むタイ陶磁器デザインの可能性と方向性について、包括的な視座を提示している。

【作品】ベンジャロン陶磁器は素焼き、施釉した後、1300℃近い高温で本焼成した白い磁器素地に、上絵で全面に文様を色付けし、さらに800℃前後の低温で再度焼き付ける色絵磁器である。ほぼ同じ行程の陶磁器としては、中国景德鎮磁器の「琺瑯彩」や有田焼や九谷焼で名高い「五彩」が挙げられる。ベンジャロン陶磁器の上絵顔料はフリット含有量が高く、名古屋のイッチンデコ盛に似た凹凸のある色絵加飾と金彩が特徴的である。ベンジャロン陶磁器の特徴は、透明釉の磁器に、素地が見えなくなるまで隙間無く全面に色絵を施す加飾である。サギアンポンパーニット ナティニー氏の作品は、第4章までの研究から得られた知見、タイ・ベンジャロン陶磁器産地で実施した技術継承、聞き取り調査、試作実験、さらに現代のタイ国民の習慣、文化、価値観を鑑み、国際的に通用しうる次代のベンジャロン陶磁器の創出を目指した陶磁器デザインの提案である。作品群はすべて鋳込み成型による磁器であるが、加飾の可能性の提示を主眼とする 1) ベンジャロン技法を展開した花器シリーズ、形状提案と加飾提案の融合を目指す 2) ティー&デザートセット I と 3) ティー&デザートセット II の2種に分類できる。

1) 花器シリーズの形状は、加飾バリエーションをまとうキャンバスとして、タイ伝統の仏具からインスピレーションを得た6面体を特徴としている。あえてその用途と形状に提案性を持たせていない。タイらしい文様のキーワードとして「幾何学形」「繊細緻密」を定め、微光沢 MgO 乳濁釉（白マット釉）を基礎釉に、ケイ酸鉄、黄呉須、顔料を添加した黒系、紫色系、赤系、黄色系、緑系の色釉薬ベースの花器を加え、14種類の独創的な加飾を展開している。

2) ティー&デザートセット I は、13種類の器（ポット、カップ&ソーサー×2、ボール&ソーサー×2、高菓子皿×2、大皿、中皿）の白マット釉上に金彩で骨描きし、多色の色絵をちらし加飾したものである。旧来のベンジャロン陶磁器のように器全面に描かず、白マット釉素地の余白を生かしたデザインである。本研究の作品表現で重要な役割を果たした基礎釉・微光沢 MgO 乳濁釉の完成にむけて、氏が積み重ねた釉薬調合と焼成実験における並外れた探究心は特筆すべきものである。陶磁原料学研究においても、氏の高度な問題解決能力を見ることができる。

3) ティー&デザートセット II も、2) と同種類の器アイテムで構成されており、濃黒顔料を加えた黒マット釉上に銀彩だけで加飾を施した作品である。黒と銀の2色に限定した加飾に独自の表現を見いだすことができる。2) および 3) のデザート&ティーという用途設定は、タイの飲食空間にとって新しいデザイン提案となっている。これまでタイの飲料習慣は水中心であったが、1960年代から国家政策として茶葉栽培と喫茶文化が広まった。アユタヤ王朝以来始まったというタイ独自の菓子文化と喫茶文化を日常食器としてのベンジャロン陶磁器で提案するためである。タイの陶磁器生産技術と現代タイ人の生活意識の現状を踏まえつつ、旧慣を超えた方策を具体的に提案できた。本研究 2) ティー&デザートセット I の原形となった試作品は、2015年度にタイ国際芸術工芸サポートセンター主催ベンジャロン陶磁器コンペティション コンテンポラリー部門で銅賞を受賞している。

【口頭発表】

サギアンポーナーニット ナティニー氏は2017年1月12日の本審査で口頭発表を行った。上記論文と作品の内容について、その研究意義を明解に説明することができた。以上のように、サギアンポーナーニット ナティニー氏はこの論文及び作品において、博士の基準を満たしていることを示した。

3 最終試験結果の要旨

最終試験では、論文、作品、口頭発表の評価について改めて口頭試問を実施した。サギアンポーナーニット ナティニー氏は、本研究で自ら基軸を定めたタイ陶磁史におけるベンジャロン陶磁器の今日的な意義を明らかにし、タイ陶磁器産業の発展に寄与した日本の窯業技術指導のプロセスを浮き彫りにする中で、タイ伝統磁器であるベンジャロン陶磁器の技術継承とともに新たなデザイン的視座を示すことができた。つまり、現代に連なるタイ陶磁器の歴史的解明においてと、現代タイにおける陶磁器デザインの提案として、着実に優れた内容を備えた研究と認められる。よって実技系博士論文に望まれる要件を規準以上に満たしており、学位の資格授与に相応しいと審査員全員一致で判断した。